

## ミカンハダニによる被害の解析的研究 (第1報)

## 温州みかん幼木における生育阻害

関 道生・小林 和幸

(佐賀県果樹試験場)

## 緒 言

生産費低下あるいは省力防除の見地から、無駄のない防除を行うためには、対象病害虫について要防除の発生、加害限界を知らねばならない。しかしミカンハダニは直接樹を枯らしたり、生産果実の品質を著しく損うことがないだけにこの限界の判定が困難であるが、先ずではじめに温州幼木をとりあげ被害の実態を理解しようとした。

## 方 法

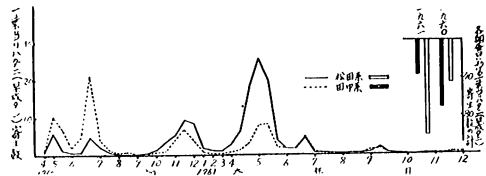
試みとしてはハダニの加害時期と加害量が寄主の生育相に及ぼす影響を知ろうとしたが、ある時期を限つて加害させることが成功しなかつたので、ここではとりあえず年間を通じハダニの防除を全く行わなかつた区と完全に防除した区を比較する。試験は1960年春、当時3年生の温州みかん幼木を対象として開始したが、供試樹は径、深さ共に60cmの無底ポットに植えられたもので両区とも松田系を8本、田中系を6本、計14本づつ供試した。開始当時における樹の生育状態は両区ほぼ均一であるとみなされた。調査はミカンハダニの発生状態を定期的に記録(1樹から葉15枚を任意抽出葉上に寄生する雌ダニ数を調査)する一方地上部の生育相を測定して両者を比較した。

## 結果及考察

試験を開始した1960年4月から1961年12月までの無防除区におけるハダニの発生状態は第1図のの通りであるが、1960年度(開始年度)の生育相には防除区無

防除区間に顕著な差がなく、ただ6月にハダニが多発した田中系において無防除区夏梢伸長量が防除区よりいくぶん少かつた。1961年度にみられた生育相は第1表の通りで4~6月の間にハダニが多発した松田系の場合、夏梢の発生本数、伸長量、着生葉数に特に顕著な差がみられた。この年の着花数は無防除区の方がかえつて多かつたが、1962年になって顕著に減少し、松田系無防除区の着花数は防除区の1/2にすぎなかつた。その他着梢の発生伸長量、幹周の肥大量等については統計的に有意な差を生じなかつた。

第1図 無防除区におけるミカンハダニの発生消長及び年間発生程度



第1表 1961年度における生育相(表中数字は1樹当たり)

調査項目	松田系		田中系	
	防除区	無防除区	防除区	無防除区
旧葉(春芽)落葉率%	30.4	25.5	36.6	33.1
幹周肥大量cm	3.5	3.3	3.5	2.9
春梢発生本数	104.9	100.0	93.0	118.2
春梢伸長量cm	715.7	525.0	603.6	648.5
春梢着生葉数	447.3	391.3	407.3	497.0
春梢発生本数	40.5	21.0	35.3	34.0
夏梢伸長量cm	963.9	593.8	934.3	886.9
夏梢着生葉数	429.5	247.1	430.2	410.7
着花数	102.9	154.0	45.3	77.0